

1

たかせぶね 高瀬舟

名前

組

番

得点

/100

● 次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

知恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで

で類のない、珍しい罪人が高瀬舟に乗せられた。

① それは名を喜助^{きすけ}といつて、三十歳ばかりになる、

住所不定^{ふじちよ}の男である。もとより牢屋敷^{らうやしき}に呼び出され

るような親類はないので、舟にもただ一人で乗った。

護送を命ぜられて、いっしょに舟に乗り込んだ同

心羽田庄兵衛^{はねだしちべえ}は、ただ喜助が弟殺しの罪人だとい

ことだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋まで連

れてくる間、この痩せ肉^{しせじし}の、色の青白い喜助の様子

を見るに、いかにも神妙^{しんみち}に、いかにもおとなしく、

自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても

逆らぬようにしている。しかもそれが、罪人の間

に往々見受けるような、温順をよそおつて権勢^{けんせい}にこ

びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗つてから

も、単に役目の表で見張つていられるばかりでなく、絶

えず喜助の挙動に細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面を覆つた

薄い雲が月の輪郭をかすませ、よつよつ近寄つてく

る夏の暖かさが、兩岸の土からも、川床の土からも

もやになって立ち上るかと思われる夜であつた。下

京^{よみ}の町を離れて、加茂川^{かもの}を横切つた頃からは、辺り

がひっそりとして、ただ、へさぎに割かれる水のさ

さやぎを聞くのみである。

夜舟^{よかふね}で寝ることは罪人にも許されているのに、喜

助は横にならうともせず、雲の濃淡にしたがつて

光の増したり減したりする月を仰いで黙っている。

その額は晴れやかで、目にはかすかな輝きがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終、喜助の顔

から目を離さずにいる。そして、不思議だ、不思議

だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が

縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、

もし役人に対する気兼ねがなかったなら、口笛^{くすい}を吹

き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしそつに思われ

たからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまで、この高瀬舟

の宰領をしたことは幾度^{いくたひ}だかれない。しかし乗せ

てゆく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当

てられぬ気の毒な様子^{ようす}をしていた。それに、この男

はどつしたのだらう。遊山船^{ゆざんせん}にでも乗つたよつな顔

をしている。

読む

1 「それ」について、

() 点 x 8

読む

/80

1 「それ」の指す内容を、文章中から五字で抜き出しなさい。

2 どんな罪を犯したのか。文章中から抜き出しなさい。

2 「罪人の間に往々見受ける」態度と、喜助の態度の違いはどのような点か。次の文の () にあてはまる言葉

をAは文章中から二字で抜き出し、Bは文章中の言葉

を使って書きなさい。

・喜助は (A) であるが、 (B) 点。

A

B

3 「絶えず喜助の……注意をしていた」について、

1 それはどんな気持ちからか。次から選びなさい。

- 警戒 興味
- 責任 威嚇

2 同じ内容を表す一文を文章中から抜き出し、初めと

終わりの四字を書きなさい。

4 「下京の町を離れて、……である」の中から、擬人

法を用いた部分を抜き出しなさい。

5 「口笛を……思われた」について、この喜助の様子

をたとえを用いて表現している一文を文章中から抜き出

し、初めと終わりの四字を書きなさい。

登場人物の思いを読み取ろう

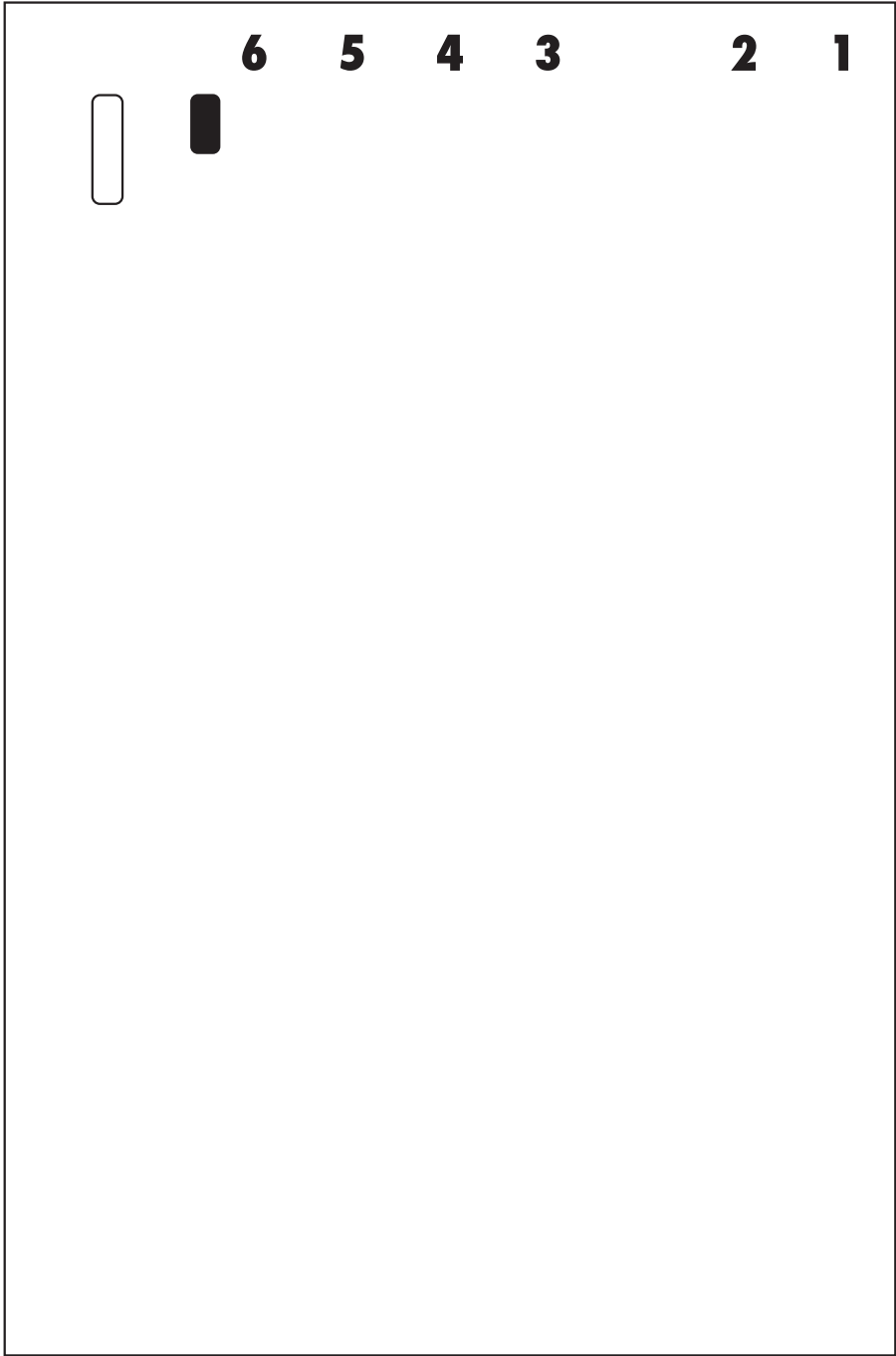
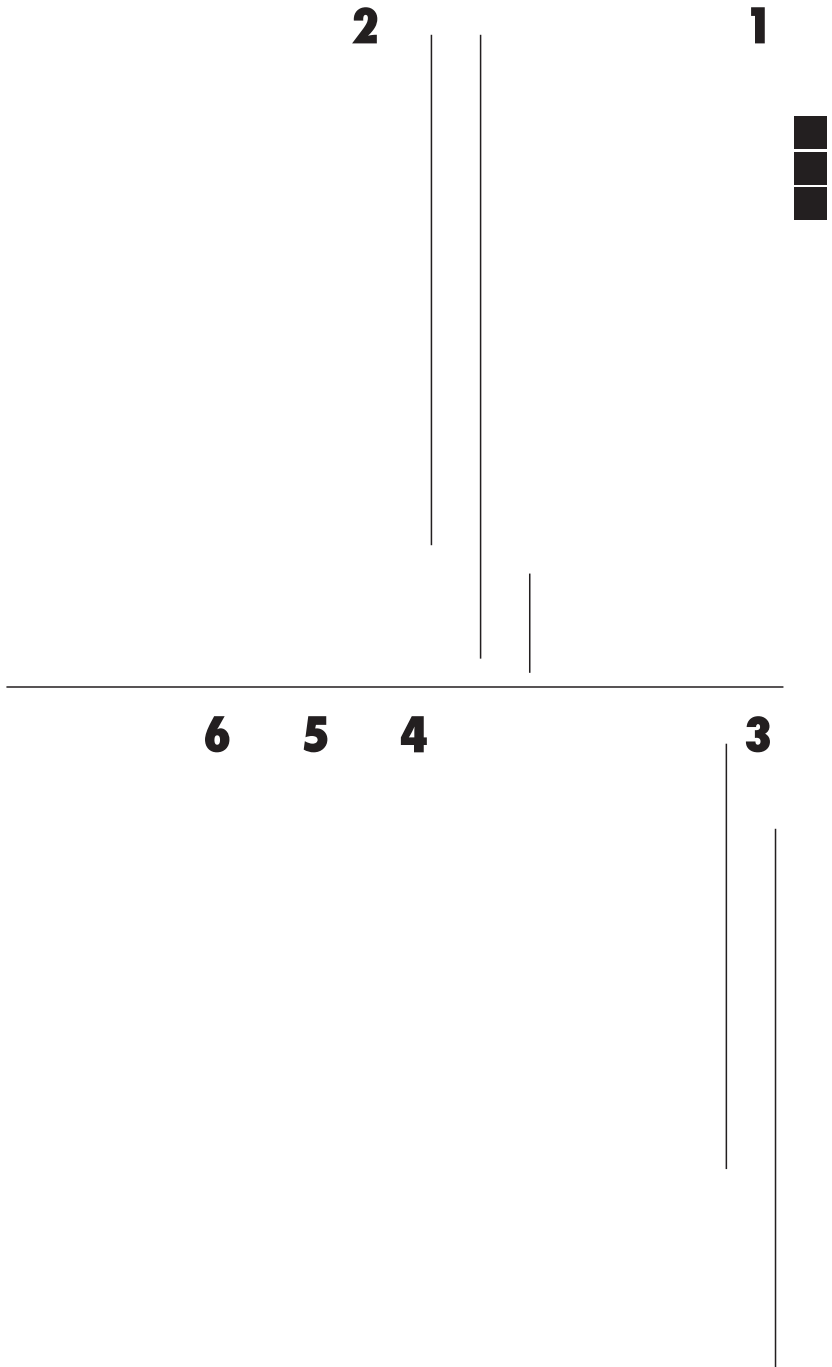
(2点)

書く

/20

6 「不思議だ……心の内で繰り返している」とあるが

庄兵衛はどんなことを不思議に思っているのか。「罪人」という言葉を使って、三十文字以内で書きなさい。



解答

1

学習日

月

日

読心

組

書<

番

名前

得点